

Title	ロンドン便り
Author(s)	羽生, 正気
Citation	デザイン理論. 1979, 18, p. 110-111
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53766
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ロンドン便り

羽 生 正 気

昨年10月より1ケ年、文部省在外研究員として、英国を主に欧米のデザインを現地で研究する機会に恵まれました。本誌が発刊される頃にはすでに帰国している予定ですが、今はまだ8月末日、所はローマです。

空は気が遠くなる程に青く、灼熱の陽光に白亜の大理石がまぶしいばかりに輝かれています。対照的に影はあくまでも黒く深く、キリコの形而上派ヴィジョン、そして古代の地中海文明への連なりを感じます。そして、木陰ではもはや初秋の気配が明らかです。

最初アメリカをまわり、英国に滞在、7月半ばからヨーロッパを北から南へ向っているわけですが、同時に近代から古代へ歴史を遡行していることになり、時空間の織りなす多様なパターンをまざまざと感じざるを得ません。アメリカは別として同じギリシャ・ローマの伝統とキリスト教信仰に結ばれたヨーロッパのうちでも、人々の生活様態や街の造形にはそれぞれの個性がみられます。ドーヴァーを渡ってベルギー・フランスに入ったとたん強くそれを感じましたが、アルプスを越へロンバルディアを経てローマに近づくにつれ、主たる研究地であった英国は、さながら異教の文明圏とさえ思えてくる程です。

英国は年中曇りがちで、夏でさえうすら寒い日が少なくなく、雨や霧に包まれることが多いようです。宿舎の旧モリス宅から眺めているとすぐそばのテムズ河の風景はしばしば茫洋として、ホイスラーの絵がリアルな視覚に基づいたことを確信させます。

こうした文化圏の差異は、民族性、言語、歴史などの諸要因によって相互依存的に形成されるのでしょうか、明らかにそれらの中でも風土の差異の重要性に気づきます。近代デザイン史の途上、ヴェルデやロースは、地域の差異を捨象した歴史的展開としての近代が、センスやモラルに圧倒的な意義をもつことを強調しました。近代デザインの反省期にある現代から

は、その歴史的必然性を十分に認識しながらも、偏った意見であったと感じざるを得ません。

とりわけ風土の差異は、人々の行動や表現に大きい影響を与えているように思われます。ヴォリンガーを俟たずとも、南欧の日照が人々をして外なる自然に親和感を育み、開放的な生活態度や芸術を生むのに対し、北欧の寒気は直情的な感性の発露を抑制して何らかの反省的知性の統括を俟つように思われます。英国の場合さらに特殊で、そうした在り方が純化された抽象的な造形に向わずに、個々の経験は実践的理性による反省の下に常に中性的に保留されるかにみえます。

英国人が事態への関心を表現するのに「普通のようにでない (unusual)」という語をよく使うのはこれと無縁ではなさそうです。そして、ラファエロ前派をも含めた主題主義、色彩や形態表現における非決定性、「紳士の良識」、「不屈の忍耐力」、「質素な生活態度」、「実際の価値観」の重視などがこれに連なって感じられます。

反面、英国における日常の運営は、トータル的にみてきわめて能率的で明快だといえましょう。局部的には日本における効率化にくらべ鈍く見える点もありますが、例えば旅行などしますと、サイン網や情報が完備され余裕をもった対応を規準として全体が設定されており、日本国内におけるより、よりよく意図が達成され豊かな旅が楽しめます。イタリアではなかなかこうはゆかないようです。人々の人間くさい対応やのびやかな感性に共感しつつも、度重なる不首尾について感情を爆発させ我を忘れて日本語でまくしたてたら、それで結構通じたといったこともありました。

デザインにおいても、このことは概していえそうです。英国のデザインには、フランスやイタリアにおけるような問題解決の明快さや表現におけるのびやかさが欠けている場合が多いように思われます。一見して「いい」と感じるよりも、英国のデザインは使ってみて生活の諸関連や体験の中で徐々にその「よさ」がわかってくるようです。